

家族と牛のしあわせを目指して

—家族経営の利点である、チームワークと
各々のスキルを活かした卓越した繁殖肥育一貫経営—

牧舎みねむら（肉用牛一貫経営・長野県東御市）

地域の概要

峯村誠太郎さんが経営する「牧舎みねむら」の所在する東御市は、長野県の東部に位置し、北は上信越高原国立公園の浅間連山を背にし、南は蓼科・八ヶ岳連峰の雄大な山なみに囲まれ、市の中心部を千曲川の清流が流れる豊かな風土と歴史に恵まれた美しい地域である。市の北部となる上信越高原国立公園の「湯の丸高原」は、レンゲツツジの大群落、アヤ



峯村誠太郎さん・伊世さん（後列）と誠太郎さんの妹のちひろさん、母のこのみさん

（表1）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭（羽）数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和57年3月				牛飼いになりたい一心で、上田市へUターン
昭和57年10月	肉用牛経営開始	乳用種雌2頭 肥育開始	自給飼料畑 2ha	自宅庭先の牛舎で飼育開始
昭和58年		乳用種雌20頭肥育	〃	古い豚舎を借り、ホル雌飼育 古電柱を使った牛舎の建設開始
昭和59年		乳用種雌50頭肥育	〃	古電柱を使った牛舎完成（50頭規模）
昭和60年		乳用種雌50頭肥育 F ₁ 40頭肥育 和牛 10頭肥育 繁殖用雌牛1頭導入	〃	牛舎を増築し、肥育100頭規模とする この年から和牛一貫経営を目指す。
昭和62年		F ₁ 雌、F ₁ 去勢 肥育100頭規模	〃	20頭の繁殖牛舎完成。
平成3年9月 ～平成4年				工場の団地化により経営地を移転 上田市から東御市へ移転 肥育牛舎150頭規模、繁殖牛舎50頭規模 の施設を建築
平成5年	和牛一貫経営を 本格的に開始	和牛肥育150頭 繁殖雌牛50頭	自給飼料畑 3ha	
平成7年		和牛肥育150頭 繁殖雌牛70頭	〃	繁殖部門規模拡大を図る
平成28年	現在に至る	和牛肥育160頭 繁殖雌牛85頭	自給飼料畑 5ha	今後、繁殖和牛100頭に規模拡大を めざす。

(表2) 経営実績 (平成28年)

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員	5.0人	
		雇用・従業員	0.4人	
	成雌牛平均飼養頭数		82.0頭	
	年間子牛分娩頭数		75頭	
	肥育牛平均飼養頭数 (肉用種)		158.5頭	
収益性	年間肥育牛販売頭数 (肉用種)		61頭	
	所得率		27.2%	
	成雌牛1頭当たり生産費用		668,346円	
	肥育牛1頭当たり生産費用		898,433円	
生産性	繁殖	成雌牛1頭当たり年間子牛分娩頭数	0.91頭	
		平均分娩間隔 (56頭分)	12.1ヵ月	
	粗飼料	借入地依存率		80%
		(黒毛和種雌若齢)	肥育開始時	日齢
	体重			300kg
	出荷時		日齢	851日
			体重	750kg
	平均肥育日数			486日
	販売肥育牛1頭1日当たり増体重 (DG)			0.93kg
	販売肉牛1頭当たり販売価格			1,127,536円
	(黒毛和種去勢若齢)		肥育開始時	日齢 (月齢)
		体重		300kg
		肥育牛1頭当たり	出荷時	851日
			出荷時生体重	750kg
平均肥育日数			496日	
販売肥育牛1頭1日当たり増体重 (DG)			0.93kg	
販売肉牛1頭当たり販売価格			1,167,412円	



肥育牛舎



子牛舎

経営・技術の特色等

【高い繁殖技術と優れた飼養管理で外部導入に頼らない安定的肥育素牛の確保】

「牧舎みねむら」では現在和牛繁殖牛80頭の一貫経営を行っている。経営主の誠太郎さんは、前経営主の父親が大病を患ったことから就農を決意。その後、平成23年に経営移譲を受けた。平成16年に家畜人工授精師および家畜体内受精卵移植の資格を取得し、平均分娩間隔12.1ヵ月と高い繁殖技術を有している。繁殖牛は平均産次数8産という長命連産で、中には14産という牛もいる。

肥育素牛の外部導入は一切行わず、すべて自家育成で、肥育成績も牛枝肉格付A4等級以上が90%以上という高い肥育成績を維持している。肥育素牛が80万円を超えるような情

況、コマクサなどの高山植物の宝庫で観光の要所となっている。

雨が少なく日照時間が長い気候と粘土質の大地を利用した農業も盛んで、巨峰、クルミ(シナノグルミ)、白土馬鈴薯(白いも)など全国有数の農作物が地域の特産品となっている。

最近では、地域の風土がワイン生産の適地であることを活かし、新たなワイン産地としての振興も図られている。

市内には、乳牛が8戸で300頭、肉牛が4戸で950頭、豚が4戸で5500頭飼育されるなど畜産農家も少なくなく、牧舎みねむらのほかにも水田と酪農を複合した循環型農業への取り組みなどそれぞれの特色を活かした畜産経営が営まれている。



勢の中で、一貫経営を行うことで、安全性が高く効率的な肉牛経営を営んでいる。

【牛肉加工品の販売収入増加などによる収益性の向上】

肥育牛は月4頭出荷し、2頭は枝肉を買い戻して直売施設で精肉・加工品として自社で販売し、2頭は精肉店や焼肉店に販売している。経費、販売労力はかかっても地産地消を貫いており、直売施設の売り上げは、平成26年には323万円であったものが28年は3.3倍の1085万円となるなど、畜産経営に対する農場の姿勢、幅広い地域振興、農業活性化のための取り組みなどが地域内での農場の好感度アップにつながったことと、安定した品質の高さが地域の消費者に評価されたことに伴う結果であると考えられる。

【家族経営協定と農場HACCPへの取り組みで効率的な経営管理を実践】

労働力は誠太郎さんを含め家族5人（現在は妹が育児休暇中で4人体制）であるが、農場HACCPに取り組み、各自が対等の立場で労働条件、経営方針等の決定を行うとともにそれぞれの担当業務を明確にし、効率的に畜産経営を管理している。

平成28年11月に農場HACCP認証を取得し、バイオセキュリティの向上とPDCAサイクルによる作業工程の見直し・スキルアップの効果で、農場成績が向上するとともに、研修や地域活動にも積極的に参加し、そこで得

られた人脈による経営効果も出ている。なお、経営主の妻が円滑に育児休暇を取得できたのも協定の効果である。

耕畜連携の活動

適正な水分調整と丁寧な繰り返し作業により良質堆肥を生産しており、(一社)畜産環境整備機構の畜産環境技術研究所へ2年に1回、堆肥のサンプルを送り、成分分析を行っている。利用者のニーズにあった堆肥の生産を目指しており、湯の丸高原、菅平高原のレタス、キャベツ、白菜などの高原野菜生産農家に販売され、地域高原野菜の生産を支えている。また、近隣の果樹農家にブドウ、リンゴ、アスパラガスの生産用に堆肥を販売するほか、家庭菜園用としても好評を得ている。

さらに、堆肥は地域内の米生産にも不可欠で、米農家の稲わらと堆肥の交換により東京ドーム5個分以上に相当する面積の稲わらを確認しており、その量は1万4000tにも及ぶ。地元コシヒカリを中心とした稲わら給与は肉質向上にも一役かっている。

地域に対する貢献

【6次産業化による地域特産品販売】

誠太郎さんの希望で直売施設の建設、商品の試作などの準備を開始し、2011年調理師免許を持つ誠太郎さんの妹が経営に加わり、営業許可の取得に至り、本格的に製造・販売を開始することとなった。

加工品は「きたやつハム(株)」に製造を委託しているビーフジャーキー、ビーフソーセージ、コンビーフ、埼玉県の業者に製造委託しているレトルトカレーなどで、農場入り口の直売場で販売しているがビーフカレーが特に人気が高く、最近、市が力を入れ全国に向けプロモーションしているワインなどとともに



販売している精肉・加工品

地域のブランド特産品として消費者に好評を得ている。また、精肉は市商工観光課がふるさと納税の返礼品としても取り扱っている。

さらに、地元果樹、野菜、ワインブドウ生産農家とともに「YO農(ヨーノー)会」(生産者の会)を組織、地元レストランと連携し会員の生産物を使用した一流シェフの料理を提供するなど地元食材の発信にも取り組んでいる。

【食育、農業教育の実践による農業への理解醸成活動】

「牧舎みねむら」では、食育・農業教育にも力を入れている。地元コミュニティ・レストランに出店し、自家産和牛肉を使用した食事を提供し評価を得るとともに地場産食材の重要性をPRし食育活動を推進している。

また、誠太郎さんの妹が有している保育士・調理師免許の資格を活かし、都会の小中学生の農業体験受け入れ、農家民宿の運営にも取り組み、食育と併せ農業・食糧への理解醸成活動に取り組んでいる。

【畜産女性の仲間づくり。地域農業者との仲間づくり】

誠太郎さんの母親は、地域内の畜産女性の仲間づくりにも積極的で、上田小県地区の畜産女性組織である「上小畜産女性ネット21」の立ち上げに参加。畜産物を材料にした商品の開発による試食会、他農場視察研修会の実



堆肥舎

施などの交流活動・子育てなどに関する悩み相談等も含めた情報交換会により、それぞれの経営改善に役立てるとともに仲間の輪を拡大している。また、県レベルでも現在まで5年以上にわたり「長野県畜産会21世紀に羽ばたく畜産を担う女性のネットワーク委員会」の委員長として県下の畜産女性の代表を務め他の農業分野・行政とのネットワークづくりを含め各種事業に積極的に取り組んでいる。

誠太郎さんの妹も長野県の農業女性の会「NAGANO農業女子」の一員として東京で開催されたトークイベントなどにも積極的に参加し、経営者本人も、地元野菜、果樹農家とともに「YO農(ヨーノー)会」を組織し、地元産食材にこだわった料理の提供などを企画し情報発信と仲間づくりに余念がない。

将来への方向性

6次化で開発した加工品販売の拡大、食育・農業教育への取り組み強化、各業界とのコラボによる地域に溶け込んだ畜産業の推進など牧舎みねむらの夢は尽きない。この夢の実現のためにも、繁殖・ほ育部門を中心とした施設整備を含め、規模拡大を検討しており、一層の組織力のアップ、対外信用力の向上、経営管理の徹底などを目指し経営の法人化も視野に入れている。